慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	大学生のテレビ視聴の変化と記憶の「個人化」
Sub Title	
Author	村山, 陽(Murayama, Yo) 志岐, 裕子(Shiki, Yuko) 藤田, 結子(Fujita, Yuiko)
Publisher	慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所
Publication year	2010
Jtitle	メディア・コミュニケーション : 慶応義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要 (Keio media communications research). No.60 (2010. 3) ,p.107- 116
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA1121824X-20100300-0107

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

大学生のテレビ視聴の変化と記憶の「個人化」

村山　陽・志岐裕子・藤田結子

1　問題の設定

最近，若者の「テレビ離れ」についてしばしば議論がなされるようになったが（NHK放送文化研究所，2008a，b），本当に若者はテレビ番組を見なくなったのだろうか。実のところ，若者の間で，動画共有サービスを利用してテレビ番組を再視聴したり，テレビ視聴と並行してインターネットや携帯電話を利用しそのテレビ番組について友人と会話をしたりというような新しい視聴行動が観察されている（志岐・村山・藤田，2009；志岐・村山，2009）。そうであれば，今日の若者のテレビ視聴における変化は，「テレビ離れ」というよりも，視聴行動の変化やテレビに対する意味づけの変化として捉えられるのではないだろうか。本稿は，以上の問いから開始した若者のテレビ視聴に関するエスノグラフィ研究プロジェクトのうち，若者のテレビの「記憶」に焦点をあてる。上記のように若者のテレビ視聴が変化しつつあるなか，大学生がどのようにテレビ番組を記憶し，そこからどのようにテレビの意味づけをしているのか，考察を試みる。

これまでメディアと「記憶」に関する研究では，メディアを通じて集合的に共有された記憶である「集合的記憶」に焦点があてられてきた。集合的記憶とは，社会学者Hallbwachs（1952，小関訳1989）が提唱した概念であり，記憶は他の人々との記憶の共有により支えられている集合的な性格を有し，共有された記憶が帰属する集団との同一性を強めるものとされる。記憶を想起する際に〈私〉と〈他者〉に共通する基礎は「社会的枠組み」と表現され，人々は「時間」と「空間」の枠組みにより集合的記憶を形成することを想定している（横山，2006）。たとえば，同窓会で久しぶりに再会した友人たちと，同じ時代（時間）を同じ学校（空間）で過ごした日々を，お互いに記憶を補いながら再構成していく共同作業がそれにあたる。集合的記憶概念の重要な点は，集団の成員として想起されることにあり，「記憶」の集団による構築性･制約性を明らかにすることにある（片桐，2003；今井，2009）。こうした性質ゆえ，近年では，歴史社会学領域において再評価されている（浜，2000；山本，2009）。とくにメディア研究領域では，伊藤（2002；2005）は，テレビを公共の記憶の創造のための技術と捉え，テレビの文化的な機能について「プロジェクトX」と「ETV2001シリーズ『特集・戦争をどう裁くか』」から分析し，テレビが特定の歴史と過去の記憶を繰り返し再創造することを明らかにしている。これらの研究では，テレビは「公共の記憶」を創り出し，集団的なアイデンティティを確立する装置として捉えられている。

確かに国内の人々が同じテレビ番組に熱中していた時代では，テレビは「公共の記憶」

を創造する装置として働いたであろう。しかし，今日では，テレビ視聴の個人化，多チャンネル化，メディアの多様化が急速に進んでいる。とくに現代の若者の場合，動画共有サービスを利用して過去に放送されたテレビ番組を見るなど，テレビ視聴における「時間」と「空間」による拘束がかなり弱まっている。このような若者のテレビ視聴スタイルは「集合的記憶」の形成に適さず，テレビはもはや「公共の記憶」を創造する装置とはなりえないかのようにも思われる。しかし実際には，若者たちはテレビ番組をしばしば話題にしており，テレビ番組の記憶を積極的に活用しているように認められる行動をしている（志岐・村山・藤田，2008）。そうであれば，このようなテレビ視聴によってもたらされる記憶は，どのように説明できるのだろうか。

そこで，片桐（2003）の提示する「集合的記憶の衰退」→「記憶の個人化」という図式に注目したい。これは，コミュニティの衰退を背景にして，共同体や歴史の「枠組み」から構築される記憶から，個々人に内面化される記憶への転換を主張するものである。この考えにしたがえば，記憶を共有する集団自体が縮小している現代の若者にとって，テレビは「個の記憶」を創造する新たな装置になっている可能性があるだろう。

そこで，今日の若者のテレビ視聴の記憶について考察するために，心理学領域における「自伝的記憶」研究を一つの有効な理論的枠組みとして参照したい[(1)]。そもそも心理学では，認知心理学を中心に，記憶はインプット・アウトプットされるプロセス（符号化，貯蔵，検索）として，検討されてきた（市川，1987；森，2007）。近年では，記憶研究の実験的アプローチに対して，生態学的妥当性の重要性が見直され，日常場面での記憶の研究が盛んになっている（井上・佐藤，2002；浜，2009）。こうした中で，日常生活の出来事や人生の経験の記憶である「自伝的記憶」にも注目が集まっている。

この自伝的記憶は，「人が生活の中で経験したさまざまな出来事に関する記憶の総体」と定義されている（佐藤，2008）。たとえば，「家族旅行の思い出」や「学生時代に体験したこと」などの自分自身についての記憶のことである。自伝的記憶研究では，記憶の機能に関する検討がなされ，①対人関係の形成，②自己の確認，③自己の方向性　などの機能が明らかにされてきた（佐藤，1998，2007；Bluck，2003）。対人関係の形成とは，聴き手とのコミュニケーションを通して社会的つながりを発展させて強める機能である。自伝的記憶を語ることを通して聴き手と情報を共有し共感性を高め，個人間のつながりが強まり多様な情報が伝達されることが指摘されている（高田，2006）。自己の確認とは，自分がどのような人間であるのかという一貫した感覚を個人に持たせる機能である。自己の方向性とは，人の態度や価値観の指針を与えたり，現在や将来の自分の態度や行動を計画したりする機能である。たとえば佐藤（2000）はある研究において，大学生を対象に教師に関する自伝的記憶を想起させた。その結果，教師への志望動機が強い学生ほど，教師へのよい自伝的記憶を持ち，それを参照していることを明らかにしている。こうした自伝的記憶の諸機能の存在は，人がある出来事を経験するだけでなく，その出来事を意味づけして想起することが自己を形成し，対人関係を左右する機能を発揮することを示唆しているという（佐藤，2008）。

本稿では，この自伝的記憶の枠組みを用いて，どのように今日の若者がテレビを記憶しているのかを考察したい。過去には「集合的記憶」の形成の役割を果たしていたといわれるテレビは，現在の若者たちの記憶の形成において，どのような役割を果たしているのだろうか。

脚　注

1．小林（2008）によれば，自伝的記憶は，Hallbwachsの個人的記憶を指しており，社会と個人と対立するものではなく，歴史的記憶とも関連するという。また，横山（2006）は個人的記憶が独立したものではなく，集合的記憶に従属したものであると指摘する。

以上の問題関心から，研究の問いとして，①「若者はどのようにテレビを記憶してきたのか」（テレビの自伝的記憶），②「若者はテレビ番組の記憶をどのように意味づけしているのか」（テレビの自伝的記憶の機能），を設定し考察を行う。方法として，この「現在」に再構成された「過去」の記憶を見出すために，個人の語り（narrative）や物語（story）を収集するエスノグラフィ（民族誌的調査法）を用い，調査を実施する（やまだ，2000；小林，2008；佐藤，2008）。

2　調査方法

本研究は，先述の通り，若者のテレビ視聴に関する研究プロジェクトの一部である。この研究プロジェクトは，調査対象者宅での参与観察とインタビューで構成されている。調査対象者は，本研究の共同研究者らが所属する大学に通う学生および調査者の知人に協力を要請し募集した。調査対象者はいずれも東京または千葉に在住する学生である（学部学生 17 人，大学院生 1 人）。調査対象者の平均年齢は 21.3 歳，男性 10 人，女性 8 人の計 18 人である。調査対象者のデモグラフィック変数を**表 1** に示す。調査は 2008 年 5 月から 8 月にかけて実施した。調査はフィールドワークのトレーニングを受けた調査者 2 人（男女各 1 名）が行い，男性の調査対象者に関する調査は男性調査者が，女性の調査対象者に関する調査は女性調査者がそれぞれ担当した。

参与観察を実施した後[(2)]，日常的なテレビの見方や，テレビに関する友人･家族との会話，昔と現在のテレビにまつわる記憶などについてインタビューを行った（3 人については調査計画上，観察調査の後日に電話でインタビューを実施した）。インタビュー内容は，調

●表 1　調査対象者のデモグラフィック変数とメディア環境

ID	性別	年齢	居住状態	テレビ所有台数	ビデオ /HDD レコーダー	新聞	PC	携帯電話	インターネット接続
A	男性	23	ひとり暮らし	1	×	×	○	○	○
B	男性	21	ひとり暮らし	0	×	×	○	○	○
C	男性	21	ひとり暮らし	1	×	×	○	○	○
D	男性	20	ひとり暮らし	1	×	×	○	○	○
E	男性	19	家族と同居	2	○	○	○	○	○
F	男性	21	ひとり暮らし	1	×	×	○	○	○
G	男性	21	ひとり暮らし	1	○	○	○	○	○
H	男性	21	ひとり暮らし	1	×	×	○	○	○
I	男性	22	ひとり暮らし	0	×	×	○	○	○*
J	男性	25	家族と同居	1	○	○	○	○	○
K	女性	21	ひとり暮らし	1	○	×	○	○	○
L	女性	22	家族と同居	3	○	○	○	○	○
M	女性	21	家族と同居	2	○	○	○	○	○*
N	女性	19	家族と同居	3	○	○	○	○	○
O	女性	22	家族と同居	4	○	○	○	○	○
P	女性	22	家族と同居	3	×	○	○	○	○
Q	女性	22	家族と同居	1	○	○	○	○	○
R	女性	21	ひとり暮らし	1	○	×	○	○	○

注 1：○は所有，×は非所有を示す。
注 2：＊は携帯電話による接続のみであることを示す。

査対象者の同意を得た上でICレコーダーに録音された。また，調査対象者の1週間の生活パターンを起床から就寝まで曜日ごとに表に記録してもらった。後日，男女の記録を統合し，調査者が共同でコーディングおよび分析を行った。本論文は上記のインタビュー部分に依拠している。

3　調査結果

3-1　過去と現在のテレビ視聴スタイル

最初に，記憶の形成に影響を及ぼすと考えられるテレビ視聴スタイルの違いについて検討したい。現在のテレビ視聴スタイルについてみると，参与観察では，①従来型のテレビ視聴のほかに，②テレビ視聴と他メディア並行利用行動（パソコン，携帯電話，ポータブルゲーム機），③新たなテレビ視聴スタイル（動画共有サービスやワンセグ放送利用）が見出された。また，インタビュー調査からは，サークル活動，アルバイト，恋愛という多忙なライフスタイルに応じたテレビ視聴スタイルが明らかになった。たとえばFは，「最近バイトが忙しくて，ニュース見てなくて，今話題（教員採用の汚職事件）になっているので（ニュースを見ている）」と語り，テレビ視聴時もパソコンを作業することが多いという。Iは，習慣として以前から「NARUTO」というアニメ番組を視聴しているが，アルバイトのために視聴できないときは，動画共有サービス「パンドラTV」を利用して視聴すると語った。

> I：今の時間帯ってお決まりとは言えないですけど，たまにバイトとかこの時間入るんで，決まりじゃないですけど，なるべく（NARUTOを）見るようにしてるんで，見れなかったら「パンドラ」っていうサイトがあって，見れるんですよ。今やってるやつが何時間かしたら。

好きな番組を好きな時間に視聴するスタイルは，番組ジャンル，性別や居住形態に関係なく幅広い参加者の間で見られた。たとえば，Oは「ドラマは定期的に見なきゃいけないし，ネットで今見れるので，あんまりテレビで欠かさずってことはないです」という。また，Nの場合，ドラマだけではなくバラエティ番組やニュースを視聴している。

> N：何かニュースでアキバ（秋葉原）の事件とかだったり，市原隼人がテレビ内で彼女がいるって言ったみたいなやつを知らなかったんだけど，そのYouTubeでそういうのがあって，そんなのがあるんだみたいな感じで，それで再生回数が多いのってやつで見てという感じか，あとドラマを見逃したときとかにちょちょっと見てます。

過去のテレビ視聴スタイルに関しては，夕食前後の家族との共同視聴についての記憶がよく語られた。たとえばIは「飯食べながらテレビ見たりとか，食べ終わってから居間で一緒に家族全員でテレビ見るとか，そんな感じで見てますね」と語った。父親と一緒に視聴した番組としてはニュース番組，母親と一緒に視聴した番組にはドラマがあげられた。さらにIは，「うちだとおじいちゃんまでいるんで，月曜だと時代劇の『水戸黄門』とか」というように，祖父母とのテレビ視聴習慣についても触れた。

一部の調査参加者からは，兄弟姉妹と一緒に，ドラマ，アニメ，バラエティ番組を視聴する話が聞かれた。Gの場合，「結構みんなで。でもやっぱりきょうだいで見るのが多かっ

脚　注

2．調査当日の調査対象者の緊張を可能な限り排除するよう，あらかじめ本調査の数日前までに面接を行い，事前にラポールを形成した。したがって，調査者と調査対象者が直接対面するのは，調査実施日時点で2回目ということになる。面接の数日後，調査者が調査対象者宅を訪問し，彼らがテレビを視聴する様子を約2時間にわたり観察した。観察内容は，調査終了後迅速に記録した。

たですね。まだお兄ちゃん一緒に住んでたんで，お兄ちゃんと見てたり，弟と見てたり」と語った。またMの場合，姉妹との共視聴に関する記憶を次のように語った。

M:「アラレちゃん」は，毎週，いつもその日がたまたまお姉ちゃんがピアノ習っていて，その日は自分が一人だったから，それがちょうどかかってる，やってる時間で，毎日それを，楽しいのがそれくらいだった気がするから，ずっと一人でそれを見てた気が。3チャン（NHK教育テレビ）は，お姉ちゃんと二人で楽しいかどうかわかんないけど，普通にかけて見てました。

一部の調査参加者は，親から「教育上の理由で」テレビ視聴が制限されていたことについて語った。以下に典型的な例としてPの話を示す。

P：それ（「家なき子」）がたぶん初めてみたドラマで，でも何か親にだめって言われてて，何か泣きながら説得して，どうしても見たいってことを言って，これを見ないと学校で話題についていけないから見せてって頼んで見せてもらってた気がします。
調査者：親御さんはどうしてだめって言ってたんですか？
P：たぶん時間が遅かったからですかね。それで確か，食事中のテレビとかもだめだったんですよ，小っちゃいころは。あと，テレビ見るのは一日30分って決まっていて，それ以外はNHKしか見ちゃだめとかってずっと言われてたんで，なぜかすごい制限がかかってたんですよ。

このように，制限にはテレビ番組の時間と内容からの側面が含まれていた。テレビ視聴時間については，遅い時間のテレビ視聴や長時間のテレビ視聴が制限され，内容に関しては，汚い言葉づかいや暴力シーンが含まれた番組などが制限されていた。

3-2　大学生が抱くテレビの記憶

（1）　過去のテレビ番組の記憶

つぎに，過去に視聴したテレビ番組の記憶について検討したい。幼稚園から小学校低学年に見たテレビ番組として，教育番組やアニメが特徴的に示された 。とりわけ，男性参加者は戦隊ものをよく記憶していた。たとえば，Aは「ロボットが一番強かったんですよ。それを倒したところなんですよ，敵を。もうだめかってところで何か最後にバーンと変形しちゃって倒したんですよ」と当時の戦隊ものの番組のあらすじを鮮明に記憶していた。

一方で，女性参加者は，少女系アニメやドラマに関する言及が多かった。Nは，いろいろなアニメや戦隊ものを見ていたにもかかわらず，とりわけ「セーラームーン」をよく記憶しているという。ただし，異性の兄弟がいる場合は例外も見られ，女子参加者でも，兄がいる場合は戦隊ものを記憶していた。以下に男性と女性の語りの典型例を示す。

N：（「セーラームーン」を）すごい見てました。わりとビデオに録って見てるやつが，何回も見てるせいか思い出に残ってます。「アンパンマン」とか「ターボレンジャー」とか。「おかあさんといっしょ」とか，たぶん毎日見てたと思うんですけど，見てた記憶はあんまりないです。すごい好きで一緒に踊ってたらしいんですけど，まったく記憶にない。

小学校高学年から中学校に見たテレビ番組としては，ドラマやスポーツ番組があげられた。とりわけ，男性参加者に比べて女性参加者の方が，当時のドラマについてよく話した。たとえばPは，「低学年だったらアニメとかで，高学年になったら，すごいドラマを毎日のように欠かさずチェックしてました。『家なき子』とか」と述べた。またOの場合，次のように複数のドラマを視聴していた習慣について語った（語りで示された子どもの頃に視聴した印象に残るテレビ番組のリストを**表2**に記す）。

O：わたし一番たぶん見てたのは中学校で，ドラマをすっごい見てました。ワンクールにたぶん5

●表2　子どもの頃に視聴した印象に残るテレビ番組の記憶

	男性	女性
アニメ	エヴァンゲリオン（2），スラムダンク（2），ドラゴンボール，サザエさん，ドラえもん，ポケットモンスター，デジタルモンスター，名探偵コナン，タイムボカン，クレヨンしんちゃん，るろうに剣心	セーラームーン，Dr.スランプ アラレちゃん，7つの海のティコ，クレヨンしんちゃん，ドラゴンボール
戦隊もの	ジェットマン，ジュウレンジャー，カクレンジャー，オーレンジャー	
教育番組	天才てれびくん	おかあさんといっしょ，天才てれびくん，ひょっこりひょうたん島
ドラマ	踊る大捜査線，オレンジデイズ，3年B組金八先生，GTO	みにくいアヒルの子，3年B組金八先生，池袋ウエストゲートパーク，家なき子（2），金田一少年の事件簿
音楽番組	ヘイ！ヘイ！ヘイ！，うたばん（2），速報！歌の大辞テン	
バラエティ	ダウンタウンのごっつええ感じ，とんねるずのみなさんのおかげでした，とんねるずの生でダラダラいかせて！！，ダウンタウンのガキの使いやあらへんで！！，めちゃ×2イケてるッ！，M-1グランプリ2001	ドリフの大爆笑，ウッチャンナンチャンのウリナリ！！
教養	生き物地球紀行	
ニュース	ニュースステーション	
スポーツ	2000年 巨人優勝，2005年 千葉ロッテマリーンズ優勝	

（　）内は，想起した人数

Figure & Table

個か。
調査者：それは多いですね。
O：結構見てたと思います。
調査者：そのころって何をやってました？
O：「金八」とか，あと何だろうなあ。

現在よく見るテレビ番組としては，男女共通してバラエティ番組が多くあげられた。性別にみると，女性参加者はドラマ，男性参加者はスポーツについてよく話した。中学校・高校時代に見たテレビ番組が，現在のテレビ番組の好みの原点として語られるケースも多く見られた。たとえば，お笑いが好きなHは，「うーん，でも中学ぐらいからほんとお笑い好きになって，そのころたぶん毎週見てたのが『爆笑オンエアバトル』っていうNHKでやってる，それはずっと見てましたね。」と述べた。スポーツ番組でも同様であり，巨人ファンのAは次のように語った。

G：…野球を見出したのは中学校ごろなんですけど，その見だした2000年で巨人が優勝したシーンは覚えてます。（中略）長嶋でしたね。東京ドームで最後5点入れて，サヨナラ勝ちで優勝した試合。

(2)　印象に残るテレビ番組の記憶

子どもの頃に見たテレビ番組の中で印象に残っているものとして，地下鉄サリン事件があげられた。たとえば，Fは，「ドラゴンボールを見ていたときに，オウム真理教の麻原が捕まって，すごく嫌な思いになった」と語っており，アニメを視聴していた最中にオウム真理教関連の速報が入ったためにアニメ放送が中断した当時の様子を詳細に記憶していた。同様に，Rはオウム真理教関連の事件について印象的に語った。

R：記憶があるのは，地下鉄サリン事件が起こったときに，まさにその当日ですよね。中継されてるのを秋田のほうのテレビで，当時何歳だっけかな。（中略）87年（95年の誤り）だから，8歳，小2～3ぐらい。わかんないです。たぶんそれぐらいですけど，やってたのは知ってるんですけど，それを見ながら，何かこういう事件が起きてるんだなあと簡単に考えて，そこらへんの従妹と遊んでた記憶はありますね。

このように，一部の調査参加者は，印象に残るテレビ番組として，一連の「地下鉄サリン事件」報道をあげ，その内容とともに自分が視聴したときの状況についても詳細に述べていた。

(3) テレビ番組の記憶から語られる進路

数人の参加者は，現在の自身の進路や職業選択との関連で，テレビ視聴の記憶を語っていた。たとえばIは，現在の職業選択に大きく影響したドラマの存在をあげた。これは，「オレンジデイズ」という男子大学生と聴覚障害を持った女性の恋愛ドラマである。Iは，このドラマをきっかけに手話に興味を持った。現在は，大学の社会福祉系の専攻に在籍し，ボランティアサークルに所属して手話を勉強している。教員志望のGの場合，最近見たドラマ「モンスターペアレント」から，将来の教員としての自分の姿について話した。

G：（ドラマで）子供が怪我しちゃって。一緒に遊んでた子供のせいに親がしちゃって，その子全然悪く（なくて），一緒にジャングルジムに登ってて，どっちが早く登れるかなあって競争してたら落ちちゃっただけで。それは日曜日にあったことなんで，先生も目が行き届かないし，別に怪我させたわけでもないのに。親がもう教師に，「先生の目が行き届いてない」とか，「うちの子が怪我して学校行けないのに，何で一緒に遊んででた子供は登校してるんだ」って無茶苦茶な要求してたんですけど。（中略）やっぱりコミュニケーションは難しいなと。親と先生の。あれ見ると，実際自分もこんな親相手にすんのかなあと。

ドラマ以外にも，あるドキュメンタリー番組の視聴を通して，自分自身の進路を考える参加者も見受けられた。Qは，授業の一環として視聴した「報道の魂」（追悼 村木良彦『あの時だったかもしれない』）から，テレビ局への就職希望を語った。

Q：課題で見たやつなんですけど，TBSの「報道の魂」ってやつで。村木さんというTBSのもとテレビの制作の人？プロデューサー？の人の話で。その人が亡くなったとかいって，ちょうど授業で，わたしは広告系というか，メディアとかなので，ジャーナリズム論をやっていて。（中略）テレビが始まったときからずっと頑張っていた人みたいな。何かそういうのを見て，結構テレビって面白いからテレビ局行きたいとか，こう思ってたんですけど。

(4) テレビ番組の記憶から語られる他者との関係

さらに，一部の調査参加者は，家族，大学のサークルのような親しいコミュニティ内で，テレビ番組を話題にしたコミュニケーションをとる傾向を示した。ドラマについては，本調査を実施した2008年前期に放送されていたドラマ「ラスト・フレンズ」が一部の大学生の間で話題になっていた。たとえば，Iは，「『（ラスト・フレンズを）見てる』って言って，その見てる人の話を聞いて，じゃあ自分も見ようみたいな。そしたらいつの間にか気づいたらみんなサークルに行ってたみたいな」と述べた。

同様に，Nは次のように語った。

N：ドラマとかは，人気の「ラスト・フレンズ」とかは友達と喋る話題にもなるし，自分が面白いっていう娯楽もあると思います。あと，ドラマとか見てても，お母さんじゃないですけど，実際自分の彼氏がこうなったらどうかとか，自分の人生がもしかしたらこうなったらどうするんだろうとかいうのは，何か見たあとに何となくは考える…

また，女性参加者の特徴として，ドラマに出演した俳優について友人と会話をすることがあげられる。たとえばＢは，「あんまりテレビの内容自体は話さないです。芸能人の話とかはするかも。（中略）『どういう人が好き？』みたいな話で，わたしはさっき言ったみたいな『小泉孝太郎がかっこいい』とか」と語る。

バラエティ番組については，小中学校時代にクラスの友人達とコミュニケーションをとる様子が明らかになった。たとえばＪは，「地元が大阪なので，お笑いに関してシビアじゃないですか，無意識でも人とコミュニケーションを取る上で基本となるのは笑わせることで，テレビから影響うけていた。あるコント自体の真似をするとか，コミュニケーションの中に笑いをいれることを，バラエティ番組から自然に学んだ。」と語っている。同じようにＫは以下のように述べる。

Ｋ：小学校のときだと，何だろう，たぶん一番みんな見てたのが，「ウッチャンナンチャンのウリナリ!!」ってわかりますか？ポケビとかブラビが生まれたやつ。あれはほんとに，あれ金曜日にやってたんですけど，まだ土曜日に学校があった時代で，土曜日学校に行くと，もう絶対その話で持ちきりになるぐらいみんな見てましたね，あれは。（中略）ほんとにあれ見てないと話ついていけないぐらい，みんな見てた気がします。

両親と同居している参加者のなかには，見逃したドラマや知らない情報について家族と会話をする様子について述べる者もいた。たとえば，Ｑは，「私が帰ってくるのが，やっぱり飲み会とかあって遅かったりして見れないんですよ，リアルタイムが。リアルタイムで結構親とかお姉ちゃんは見ているので，「どうだった？」って聞いて，「今回もよかったよ」とか言ったら「ふーん」みたいな感じで」と述べた。また，Ｐは次のように語った。

Ｐ：親の趣味が，私があまり見ないものを，旅行番組とか，テニスの試合とかをよく見ているんですけど。それを一緒に見ているときに，それについていろいろ聞いたりとか，教えてもらったりは，そういう話題の種になったりすることはよくあります。

このように，同居している親とテレビを一緒に視聴しながら，その番組内容について会話をする参加者が見られた。一緒に見る番組として，ドラマ，クイズ番組などがあげられた。

▶ 4　考　察

以上の参与観察とインタビューの結果から，本研究の問いである①「若者はどのようにテレビを記憶してきたのか」（テレビの自伝的記憶），②「若者はテレビ番組の記憶をどのように意味づけしているのか」（テレビの自伝的記憶の機能）について考察したい。

第１の問いであるが，まず過去と現在のテレビ視聴スタイルの自伝的記憶を比較すると，子どもの頃のテレビ視聴スタイルとして，「家族との共同視聴」が多く想起された。また，現在のテレビ視聴スタイルとしては，「新たなメディア（特に動画共有サービス）を利用した個人視聴」が特徴的に示された。この結果について，子どもの頃は，夕食時のテレビ視聴を通して特定の家族成員と集団的記憶を共有できる環境であった一方で，大学入学後はライフサイクルや居住形態の変化を背景に，大学生は家族という集団を通した記憶が形成されにくい環境にいることが示唆された。

ただし，方法論的な観点から見ると，過去については「主観的」な語り，現在については調査者の「客観的な」観察という調査方法の違いがあったことを考慮する必要がある。この違いにより，過去のテレビ視聴スタイルについては，より記憶が呼び起されやすい家

族との関係にフォーカスされた可能性もがあるだろう。

つぎに，大学生のテレビ番組に関する自伝的記憶の語りを検討した。過去と現在のテレビ番組の自伝的記憶を比較すると，性差が特徴的に示された。男性は「戦隊もの」女性は「少女系アニメ」，現在のテレビ番組の記憶は，男性は「スポーツ」「お笑い」女性は「ドラマ」がそれぞれ特徴的に示された。

他方，過去・現在ともに，若者が共通して想起できるようなテレビ番組は見出されず，多種多様なテレビ番組があげられた。言いかえれば，現代の若者に共通して印象に残るようなテレビ番組は見出されなかった。これは，若者にとって，テレビは集合的記憶を想起させる装置ではなくなっていることを示唆している。

この結果は，片桐（2003）の提示する「集合的記憶の衰退」から「記憶の個人化」へという図式と一致するものであり，若者のテレビ番組記憶の内面化を示唆するものである。たとえば，国広・大坪（2009）の高齢者を対象にしたテレビ番組の記憶に関する調査結果を見ると，「皇太子殿下の御成婚」などのように共通した記憶が見出されている。国広・大坪（2009）の研究結果との比較からも，メディア環境の変化に応じた若者の記憶の個人化が鮮明に表れている。

ただし，例外的に印象的なテレビ番組の記憶として「地下鉄サリン事件」が共通に語られた。この結果について，Baumeister，Finkenauer & Kathleen（2001）が指摘しているように，否定的意味が強い出来事の方が肯定的な出来事よりもインパクトが大きく，重要な出来事として記憶されていると考えられる。高山・余語（2007）でも，本研究と同様にオウムサリン事件の心理社会的インパクトが大きいことが示されており，オウムサリン事件のインパクトの大きさを物語る結果である。

第２の問いである，テレビ番組の自伝的記憶の意味づけについては，大きく２つの傾向が見出された。まず，現在の自分の進路や興味・関心と結びつける意味でのテレビ番組の記憶が語られた。これは，片桐（2003）の指摘する「記憶の内面化」の表れであり，若者がテレビ番組の記憶を想起することに，「現在の自己」および「未来の自己」の意味を見出していると推測される。

つぎに，他者とのコミュニケーションを促進する意味でのテレビ番組が語られた。ベルクソンの記憶論から集合的記憶を検討した横山（2005）によれば，帰属感を失った個人は，破壊された社会的連帯を問い直すことで帰属感の回帰を可能にするという。つまり，個人化の進展する社会の中で，サークルのような小集団やインターネット内の仲間とテレビの記憶を共有することは，若者にとって新たな関係性の構築の試みという重要な意味があるものと考えられる。自伝的記憶の機能という観点から見ると，前者の意味づけは自己の確認機能や自己の方向性機能，後者の意味づけは対人関係の形成機能にそれぞれ対応するものだろう。

最後に，「記憶」の観点から，若者の新たなテレビ視聴スタイルについて解釈を試みる。記憶を共有する共同体や集団の縮小にともない，若者はテレビ番組の記憶を，「自分自身の記憶」として捉える傾向が強まった（「記憶の個人化」）。その一方で，ネットや小集団内に他者とのつながりを求めるようになった若者は，時間や空間から解放された「新たなテレビ視聴行動」を通して，他者とのテレビの記憶の共有を試みていると言えよう。

今後さまざまな社会環境にいる異なる世代を対象に，テレビ視聴の記憶について検討する必要がある。とりわけ，生まれながらにインターネットが普及し多様な形でテレビを視聴できる環境にいる現代の子ども達のテレビ視聴スタイルは，自伝的記憶の観点からさらに議論を深められるのではないだろうか。さらに，佐藤（1998）や高橋（2000）も指摘するように，記憶の研究は１つの学問領域に納まらないものであり，量的および質的研究方法を用いた学際的な協働が必要となってくるだろう。

●引用文献

Baumeister, R, F., Finkenauer. C., & Vohs, K. D.（2001）Bad is stronger than good. *Review of General Psychology*, 5, 323-370.

Bluck, S.（2003）Autobiographical memory: Exploring its functions in everyday life. *Memory*, 11, 113-123.

浜日出夫（2000）記憶のトポグラフィー，三田社会学，27，4-16.

浜日出夫（2007）歴史と記憶 長谷川公一・浜日出夫・藤村正之・町村敬志（編） 社会学有斐閣 172-199.

市川伸一（1987）認知心理学とは何か 市川伸一・伊藤裕司（編）認知心理学を知る プレーン出版，1-9.

今井信雄（2009）死者と記憶 ―震災を想起させる時間，空間そして映像について― 大野道邦・小川伸彦（編）文化の社会学 - 記憶・メディア・身体― 文理閣 90-106.

井上毅・佐藤浩一（2002）日常研究の意義と方法 井上毅・佐藤浩一（編）日常認知の心理学 北大路書房 2-16.

伊藤守（2002）公共の記憶をめぐる抗争とテレビジョン 社会学年誌，43，59-75.

伊藤守（2005）記憶・暴力・システム 法政大学出版局

片桐雅隆（2003）過去と記憶の社会学 世界思想社

小林多寿子（2008）自己を書くことと記憶 ―アルヴァックスの自伝的記憶― 心理学評論，51，184-195.

国広陽子・大坪寛子（2009）テレビとは何だったか―記憶される娯楽としてのテレビ 武蔵大学総合研究所武蔵メディアと社会研究会

Halbwachs, M（1952）On Collective Memory. In Paris, Presses Universitaires de France 小関藤一郎訳 1989『集合的記憶』行路社

森敏昭（1995）認知心理学とは 森敏昭・井上毅・松井孝雄（共著）グラフィック認知心理学 サイエンス社，1-12.

NHK 放送文化研究所（2008a）調査報告「世論調査から読み取る 20 代のメディア利用」配布資料

NHK 放送文化研究所（2008b）ワークショップ「テレビは 20 代にどう向き合っていくのか」配布資料

佐藤浩一（1998）「自伝的記憶」研究に求められる視点 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編，47，599-618.

佐藤浩一（2000）思い出の中の教師―自伝的記憶の機能分析 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編，49，357-378.

佐藤浩一（2002）自伝的記憶 井上毅・佐藤浩一（編）日常認知の心理学 北大路書房 70-87.

佐藤浩一（2007）自伝的記憶の機能と想起特性 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編，56，333-357.

佐藤浩一（2008）自伝的記憶の方法と収束的妥当性 佐藤浩一・越智啓太・下島裕美（編）自伝的記憶の心理学 北大路書房 2-18.

志岐裕子・村山陽・藤田結子（2009）若者のテレビ視聴とメディア並行利用行動―大学生のオーディエンス・エスノグラフィ調査から メディア・コミュニケーション，59，131-140.

志岐裕子・村山陽（2009）若者はどうテレビをみているのか？ ―大学生のオーディエンス・エスノグラフィ調査を中心に― 日本マス・コミュニケーション学会 2009 年度秋季研究発表会

高田理考（2006）過ぎ去りしときを思い出す 太田信夫（編） 記憶の心理学と現代社会 有斐閣 283-292.

高橋雅延（2000）記憶と自己 太田信夫・多鹿秀継（編）記憶研究の最前線 北大路書房 229-246.

高山大輔・余語真夫（2005）社会的出来事の集合的記憶（2）－心理社会的インパクト評価に基づく出来事の分類－. 日本社会心理学会第 46 回大会論文集

山本敦久（2009）メディアと記憶 伊藤守（編）よくわかるメディア・スタディーズ，ミネルヴァ書房 122-123.

やまだようこ（2000）人生を物語ることの意味 やまだようこ（編）人生を物語る 生成のライフストーリー ミネルヴァ書房 1-33.

横山寿世理（2005）失われた帰属 - アルヴァックスの集合記憶とベルクソンの自我 大野道邦（編） 日仏社会学叢書第 2 巻 フランス社会学理論への挑戦 恒星社厚生閣 191-209.

横山寿世理（2006）集合的記憶 宇都宮京子（編）よくわかる社会学 ミネルヴァ書房 112-115.

（村山 陽 慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程）

（志岐裕子 慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所研究員）

（藤田結子 慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所准教授）